



MY GILLETTE ITALY, SEEN UP CLOSE

Ferdinando Frega — Nando the Scribe

間近で見た、私のGILLETTEイタリア

予測のつかない人間であることには利点がある。だが死角もある — 視界がひとりでに晴れるのを待つ、あの時間だ。そして、ちゃんと晴れる。待つことを知っていさえすればいい。もっとも、それはイタリア人の得意とするところではない。

上流での構想もなければ、計画もない。そういうのは、思慮深そうに見せることで高給をもらっている連中の仕事だ。本当のデータは、あくまで本能と直感に結びついている — この2つは絶対の価値である。私たちが有能な女たちの息子であることを、決して忘れずに。決して忘れるな。

アメリカ人はそれを、こともなげにワーク・イン・プロGRESSと呼ぶ。私たちイタリア人には経営のビジョンがなく、2000年たったいまも自分の陣地を守りつづけている — 誰が何を持っていたかを言い争いながら、本当のところ誰が何を持っていたのかは決して問わずに — そして古代ローマ人を引き合いに出す。水道橋と便所の腕利きの建設者、服従と支配と篡奪と差別の達人、果てしない娯楽と乱痴気騒ぎにくるまれ、悪徳は多く、美德は少ない。2000年前に、ひとつの言葉、一冊の本を携えてやってきた同業者を十字架に釘で打ちつけた民だ — その男はベゾスとAmazonの到来を告げに来たのでは決してなく、ただ、商売というものがいかに他人の犠牲の上に築かれ、所有されるかを示しに来ただけだったのに。

結局はすべてを失い、私たちに公衆便所と政権の座のメローニだけを残した民だ — メローニはアメリカの熊と戦っているが、その熊は、かつて美しい女を金で屈服させたというだけの理由で、生まれたときから女に負けていたことをいまだに認めようとしなない。

彼が知らないのは、女の見かけの服従こそが、隠された本当の征服だということだ — それを読み取れるのは、ポケットの空っぽな、進化した男だけである。そして彼のそそり立つ資本が膨らんでいくあいだ、彼女はその力を自分の両手のなか

で最適化し、収められる分だけをきっちりと握っている。クルーピエがカジノのテーブルをさばくように。

イタリア。20日間の休暇でやってきて、うまいものを食べ、そしてすぐに立ち去る国。

なぜなら、私がすすめる場所ではないからだ。

ナンド